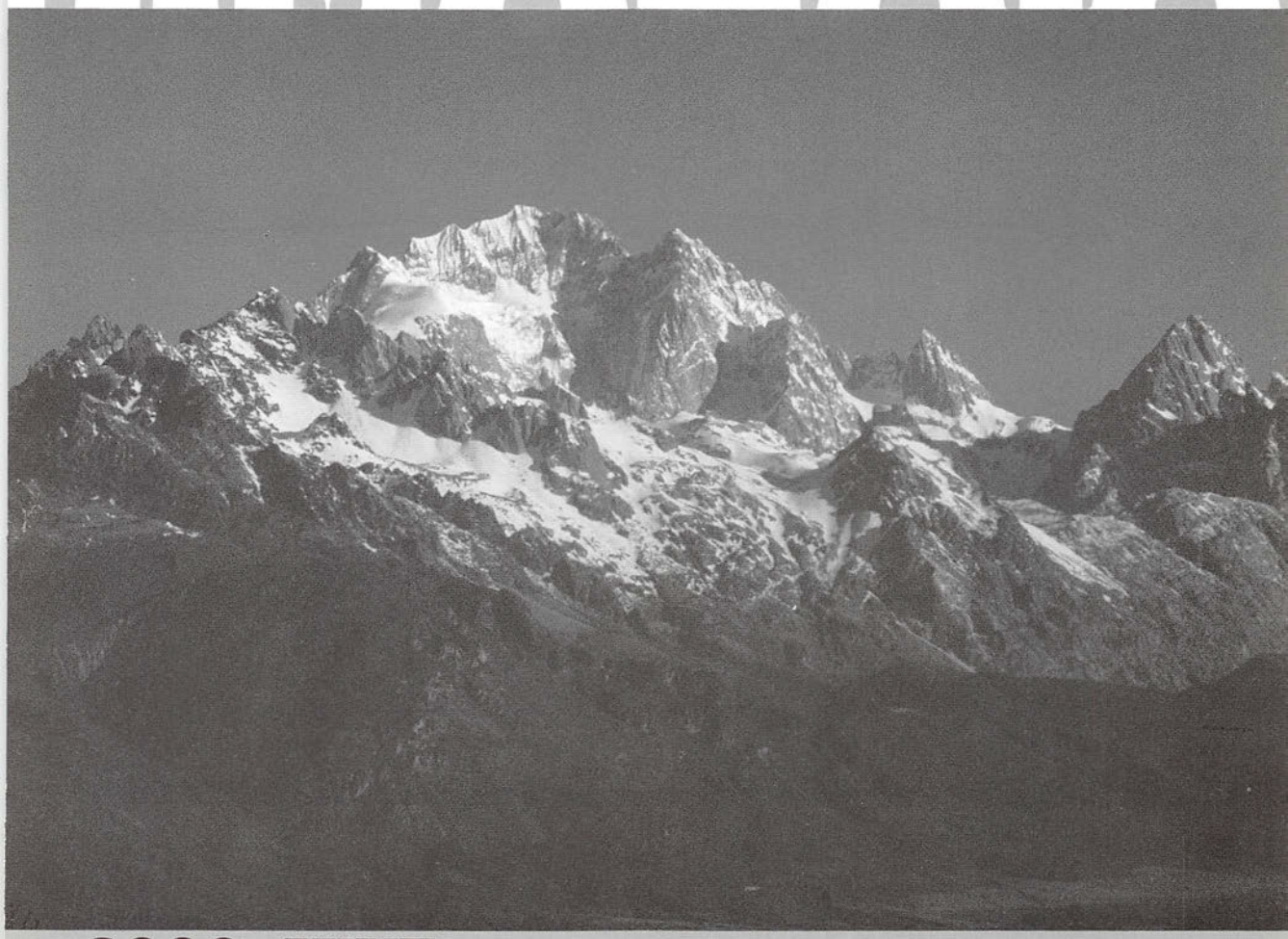
昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成12年6月1日発行（毎月一回1日発行）
ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.343



2000 JUNE

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN ——— HAJ

2001年ＨＡＪ登山隊隊員募集
中、ネ国境 ヤンラ・カンリ（7,429ｍ）

ガネッシュ・ヒマールと言う名で日本人には馴染み深い山群の主峰がヤンラ・カンリである。

1955年10月24日、スイスの著名な登山家のレイモン・ランベール（41）と、フランスの女流登山家のクロード・コーガン（29）ら３人によって、ネパール側のサンジュン氷河から初登頂された。

60年５月31日、イギリスのＰ.Ｊ.ワレイスとギャルツェン、ノルブ２人のシェルパが主峰の東にあるドームに登頂したが、主峰は断念している。

いまだに第２登を許していないが、今回の計画は、中国領の北面から登頂を目指すもの。北面は1998年のＨＡＪ隊がカバン峰の帰途偵察隊として初めて入山し、登路を探った。手つかずの新鮮な山であり、静かな山行が楽しめる。

意欲ある岳人の応募を期待します。

記

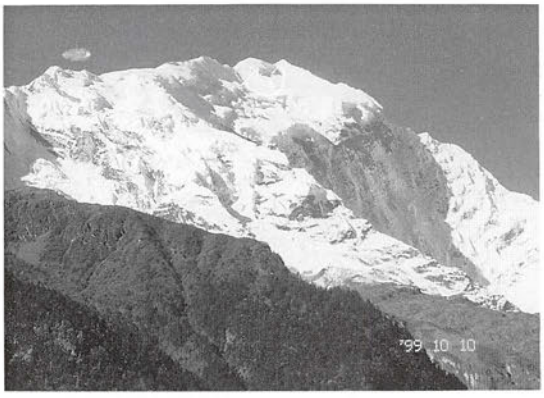
1.期間　2001年９月10日～11月８日（60日間）

2.募集人員　10名程度

3.負担金　100万円

4.資格　冬山の稜線を20kg程度の荷物を持って行動できる登山経験のあること。協調性があること。未知の山に挑むリスクを認識できること。

5.申し込み〆切　2000年６月30日



▲ヤンラ・カンリ北面。中央左上から右下の稜を予定

表紙写真

2000年３月末、現代のシャングリラ（桃源郷＝香格里拉）、中国は雲南省の麗江～中甸を訪れ、王龍雪山（5,596ｍ）の勇姿をぐるり一周して楽しんだ。現地のガイドの話しでは、岩がもろく未踏峰とのことだったが、帰国して1984年ＨＡＪ隊（飛田和夫さんら）が挑んだが断念した後、アメリカ隊によって初登頂されたことを知った。（江尻健二）

ヒマラヤ No.343

1．アッサム、アルナチャール、シッキム冬の旅　沖　允人
7．ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・BOOKS・ヒマラヤから〉
10．日本隊ヒマラヤ登山と遭難　山森　欣一
18．最も困難な山・Ｋ２（8,611ｍ）　中川　裕
23．ネパール・ヒマラヤ2000年春 登山隊一覧表
24．寸感・事務局日誌

アッサム、アルナチャール、シッキム冬の旅

1999年12月23日～2000年1月8日

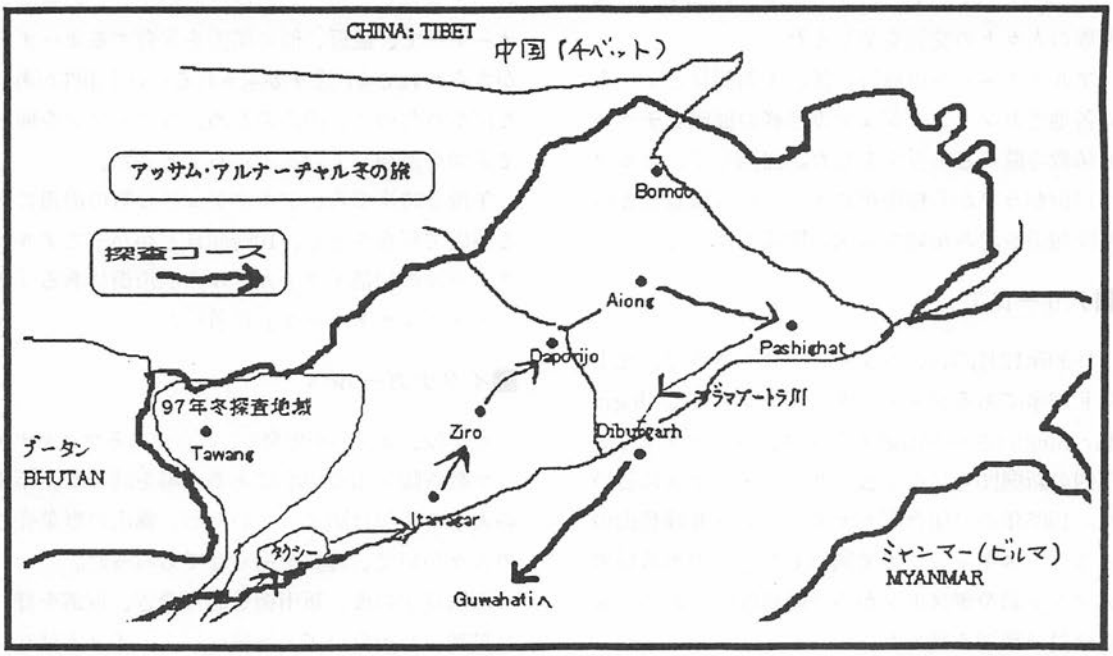
沖　允人

概要

インド北東部辺境地帯には、北と東を中国、西をブータン、南東をミャンマー(ビルマ)、南をバングラディシュに囲まれたセブン・シスターズと呼ばれている7つの州がある。アルナチャール・プラディーシュ(以下、アルナチャールと略記)(Arnachal Pradesh)、アッサム、マニプール、メガラヤ、ミゾラム、ナガランド、トリプラ（Assam、Manipur、Meghalaya、Mizoram、Nagaland、Tripura）である。この地域には、250種族を超す少数民族が住んでおり、それぞれ独特の生活様式を昔のままに保持している。特にブラマプートラ(Brahmaputra)河の北、アッサム・ヒマラヤの山岳地帯とその南山麓に広がるアルナチャールはめずらしい山岳民族・約27種族が住んでいるが、交通が不便なこともあって訪れる外国人は少ない。

1998年1月のアルナチャール西部にある東・西両カメン(Kameng)地区の探査に続いて（「ヒマラヤ」1998年5月、318号参照）1999年12月、沖允人、沖道子と中京山岳会の尾崎源一、梶田明、武藤政之、上田京子の6名は、北東部のアッパーとローワーの両スバンシリ(Upper & Lower Subansiri)地区、東・西の両シアン(Sian)地区の各地の探査を行った。

インド北東部の辺境地帯は、中国との国境問題で山岳地帯は厳しい警戒が敷かれており、また、南部のブラマプートラ河の南の各州は民族独立運動や経済不安などのためにテロが横行していて、危険地帯となっている。それ故、インド政府は、これらの地域の入域を厳しく制限している。私たちは制限地区入域許可(Restricted Area Permit)取得のために1年以上前から準備をした。申請をしてから4ヶ月たって、地域限定、期間6日間、4人以上の団体、アルナチャールの旅行社のエスコート付ツアーにという条件付きでやっと許可が



▲アルナチャール探査コース

▼イタナガールのラマ教寺院とメンバー

おりた。

行程は、アッサムのガウハティからアルナチャールの州都イタナガール(Itanagar)に行きそこからローワー・スバンシリ地区のヅィロ(Ziro)、アッパー・スバンシリ地区のダポリジョ(Daporijo)、西シアン地区のアロン(Along)、東シアン地区のパシガート(Pashighat)まで車で行き、パシガートからブラマプートラ河を筏のような原始的なフェリーボートに乗り、7時間かかって下り、ディブルガール(Dibrugarh)に着き、さらに南下してアッサムのガウハティに帰着するという約1500kmの旅であった。現代文明に毒されていない村々の風景や、明るく幸せに暮らしているアパタニ(Apatani)、アピ(Api)、ニシ (Nishi)、タギン(Tagin)の各種族の人々との交流を楽しんだ。

アルナチャールの旅行の後、1週間ほどシッキム各地でカンチェンジュンガ連峰の展望とチベット仏教寺院などの見学をした。帰国して、カルマパ17世がラサから秘密裡にインドに入域したとの新聞報道を読み複雑な両国の関係を思った。

■デリーにて

1999年12月23日、ニュー・デリー空港で、元IMF理事であるジョギンダル・シン(Cdr、Joginder Singh)さんの出迎えを受け、ニュー・デリー市内の新興団地にある彼のゲスト・ハウスに着いた。1985年の日印合同サセル・カンリII峰登山のときベースキャンプまで同行したことのある長男のアシシ君のボストンから一時帰国しており、家族全員で歓迎を受けた。

翌日は、ニュー・デリーに滞在し、各国の大使館が集まっているチャナキャプリ近くにあるニュー・シッキム・ハウスでシッキム州入域の特別許可を取得した。ここにはシッキムの民芸品売り場もある。

■アッサムへ

12月25日、早朝、ニュー・デリーからアリアンス・エアで空路アッサムのガウハティへ着き、外国人登録を済ませた後、イタナガールへの約400kmの旅を開始した。曇り、時々日がさしていた。アルナチャール滞在中は同じような天気が続いた。

アルナチャール入域許可は取得できたが、入域許可料として一人50ドル、1日当りの宿泊、交通費、食事で一人100ドルという、ホテルらしいホテルは皆無のインドの辺地旅行としては法外な料金を払わされた。

ガウハティからイタナガールへの国道52号線の途中に広大なアッサム茶園があり、色とりどりの民族衣装を着た10人ほどの女性が背中に背負っている籠に要領よく若芽を摘んでは入れていた。

茶摘み風景の写真を撮っていると、突然車が止まり、ターバンを捲いた立派な顎ひげの大柄な男性が3人の銃を持ったガードマンを引き連れこちらにやってきた。瞬間、カメラを取り上げられるのかと緊張したが、このひげの紳士はこの茶園のオーナーで、最近、他の茶園を保有するオーナーがさらわれて身代金を要求されるという事件があったばかりなので、用心のため、ガードマンを雇って茶園を巡視しているところであった。

午後2時半ごろ、デキアジュリの町の沿道にある茶店で昼食をとり、10時間ほどかかってアルナチャールの州都イタナガールの旧市街にある「ホテル・アルナチャール」に着いた。

■イタナガールへ

翌早朝、ホテルを出発し、高台にあるマハヤナ・ラマ教寺院と市の中心にある市場を訪ねた。市場の大半の店舗は閉まっていたが、露店の野菜売りの人々がいて、写真を撮らせてもらった。

市場見学の後、新市街を通り過ぎ、坂道を登った見晴らしの良いイタ城跡に行く。イタとはレンガの意味で、ナガールは町のことである。イタ城

跡には上部が崩れたレンガ造りの2つの塔が残っていた。塔から離れたなだらかな稜線の広場で、大勢の子供や大人たちが遊びにきていて、チキン料理を作っていた。炊き上がったご飯はバナナの葉で蒸されていた。地酒が振舞われ、私たちも遠慮なくごちそうになった。ここ140km圏内にニシ族が1集落約10万人規模で、3つの集落に分かれて住んでいるという。10年毎に国勢調査で記録されているという。ニシ族の他にアパタニ、アピ、タギン、アディ(Adi)、ミリ(Miri)族の6種族がいるそうだ。

■ヅィロへ

ホテルに帰り、昼食後、ヅィロへ向けて出発(158km)。一旦、昨夜、通ったグムト(Gumto)のチェック・ポストからアッサム州に出て、ジグザグの坂道を3時間ほど走り、キミン(Kimin)にあ

▲チョンマゲ風の髪をしたアパタニ族の男性

▼刺青と木を鼻に嵌めたアパタニ族の女性

るもう一つのチェック・ポストに着き、アルナチャールに入る。ここで、インナーライン入域許可とアルナチャール内の旅行許可書の提示とチェックが必要で、1時間ほど待たされた。

チェックを受けている間、近くを散策した。要所々々の街角に黄色の看板に黒字で各町までの距離が書かれてるのを目にした。ここからヅィロまで104km、ダポリジョまで265kmとあった。近いようであるが、悪路のため、時速10〜20kmしか走れず、100kmあれば5時間以上かかる。

18時にヅィロの町の南にあるハポリ(Hapoli)の村の標高約2000mの丘にある「ブルー・パイン・レストハウス(Blue Pine Rest House)」に着いた。「青松ホテル」の名前の通り、付近には松林があり、なかなかきれいなホテルである。ディックローム川がホテルの近くを流れていて、稲らしいものの収穫跡か、黄色の畑が中州に眺められた。天気がよければここからアッサム・ヒマラヤが遠望できるというが、残念ながら今日は曇りで山は見えない。アッサム・ヒマラヤはアロンの近くからも見えるという。

■アパタニ族の部落

12月27日、朝食前の早朝7時から1時間ほどアパタニ族の部落を訪ねた。

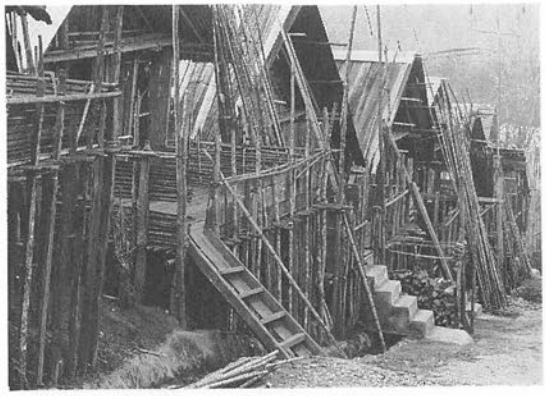
朝霧の中で見た竹の家が立ち並ぶ部落の入り口は、童話の世界を連想させる。すべてが竹でできている。竹造りの高床の家が一家族ごとに順序よく並んで建っている。道路には、竹を集積する高床のテラスが所々に作られている。長い竹が縦に割かれ、しなやかに弧を描いて重ねられ、丸い筒

のままの竹は束にされて至る所に立てかけてあった。高床のテラスは筒のままの竹で作られ、家の周りの壁は割かれた竹で編まれている。垣根も筒の竹であり、先端が無造作に土の中に差し込まれていた。

竹を細かく割いて祈祷用の飾り物が編まれている。この飾りが家の前にあると、現在、病気の人がいるという印なのだそうだ。物を入れる籠、鶏の小屋、日用品のすべてが竹製である。竹、竹、竹の部落を歩いていると、少しずつ朝の目覚めから人々の生活が動き始めてきた。

毛布のような布で頭からすっぽり包み込んだ人がひとり、ふたりと歩き始めると、学校に出掛ける子供たちが通る。また、アパタニ族特有の風習で、輪切りにした木を両鼻にはめ込み、額から鼻に一本と、顎に何本も灰色の刺青をした女性が通り、征服の女学生のグループが通り過ぎていく。自転車の後ろの荷台に教科書をくくりつけて走っていく男子学生と、往来も賑やかになってきた。

高床の一つしかない戸が開けられたので、その中の一軒を見学させて貰う。外から入ると中は暗さに慣れるまでは解らない。ワンフロアーになっていて、中央に囲炉裏が切ってあり、日本の昔と変わらない。囲炉裏の向こうに台所があり、なかなか使いやすいように作られている。その奥にプライベートルームが裏口に通じる半間を残して一部屋が作られている。囲炉裏を囲んで食事をし、団らんを楽しみ、そして、ここで眠るのだそうだ。側面には衣服が沢山掛けられていた。猫が幾匹もうろうろしていた。この家の家族は5人。中には二世代で生活している家族もあるそうだ。



▲竹造りの家

■ガンディ市場

朝食後、宿舎を出発し、町の中心にあるガンディ・バザール(Ghandi Market)を見物。バザールは朝6時頃から野菜売りが店をあけ、その他の店は冬は10時頃に開くという。野菜や肉、雑貨など生活必需品はもちろん衣料なども沢山ある。食用にするバナナの花、そして、筍など種類も豊富である。

■新築中の竹造りの家

アッパー・スバンシリ地区のダポリジョの90km手前のところに新築中の家があり車を止めて見物した。家族と近所の人たちが総出で手伝っていた。顎に刺青のあるアパタニ族とニシ(またはニシャン、Nishi or Nishang)族の人が一緒に働いていた。男達がトラックで、束ねたニッパヤシの葉を運んできた。新築の屋根にするのだという。集落が総出で家を建てるなどというこのような習慣も少しずつ消えていきつつあるようだ。

ダポリジョの町はスバンシリ川のそばにある。ドゥパロジョ (Duparjo) という名の小高い村のところにあるレストハウスに17時30分に着いた。標高は299mである。濃い色のアッサム紅茶を飲む。18時15分から食事。ダルスープ、カリフラワーのカレー煮、魚の煮物、白い御飯、紅茶であった。室内で12℃で思ったほど寒くない。

■アルナチャールのお粥

12月28日、朝食にお粥を作ってもらった。アルナチャールの米は粘りがあって、炊くと日本のご飯そっくりである。このゲストハウスは、とてもいい場所に建っている。宿の庭の先は切れて高台になっていて、遥か下にスバンシリ川が緩やかに流れている。その風景は今でも脳裏に焼き付いている。この川の流れはあの悠々たる大河ブラマプートラ河に続いているのだ。

朝食をすませ、タポリジョからアロン(172km)へ向かう。スバンシリ川を渡って西シアン地区に入る。途中でアディ(Adi)族とアディ・ガロン(Adi Gallong)族の集落、バラルーバ村に寄る。200人が住んでいるという。

12時40分頃、キミ(Kimin)村が一望できる位置の小高い丘にあるゲストハウスに寄って昼食をとった。遊びにきていた女の子が英語を話したので村の様子がよくわかった。

■タギン族の村

タギン族の住む村を通る。若い女性が大きいパパイヤの皮をむいていた。男性が竹を削って飾りを作っていた。病気の治癒祈願や死者の弔いに使用するという。とれたばかりの鹿と猿の皮が生々しく、なめしてあった。

■アロン博物館

アロンに着いて、博物館と工芸品売り場を見学し、アロンの裏町のようなところにある「イースト・ホテル (East Hotel)」に泊まる。インド式安宿である。17時まで電気がこない。

12月29日、早朝6時半に宿を出てアロンからパシガートへ向かう (77km)。近くの商店はすでに開いていた。

小さい川を渡り、東シアン地区に入る。ここは、ヒマラヤ山脈を縦断して大きくチベットからアッサムに流れ込んでいるブラマプートラ河の中流域で、このあたりでは、ディハン河またはシアン河(Dihang or Siang)と呼ばれている。シアン河の上流のニングイン(Ningguing)あたりまで自動車道路ができているという。片道約120kmあり、1泊2日の行程になるという。

■長い吊り橋

途中で、アパタニ族の集落を見学した。村の外れには蔦と竹でできた長い吊橋があり、沢山の村人が行き来していた。この吊橋を渡り、3時間あまりかけて山の上にある畑や隣村に通うということであった。

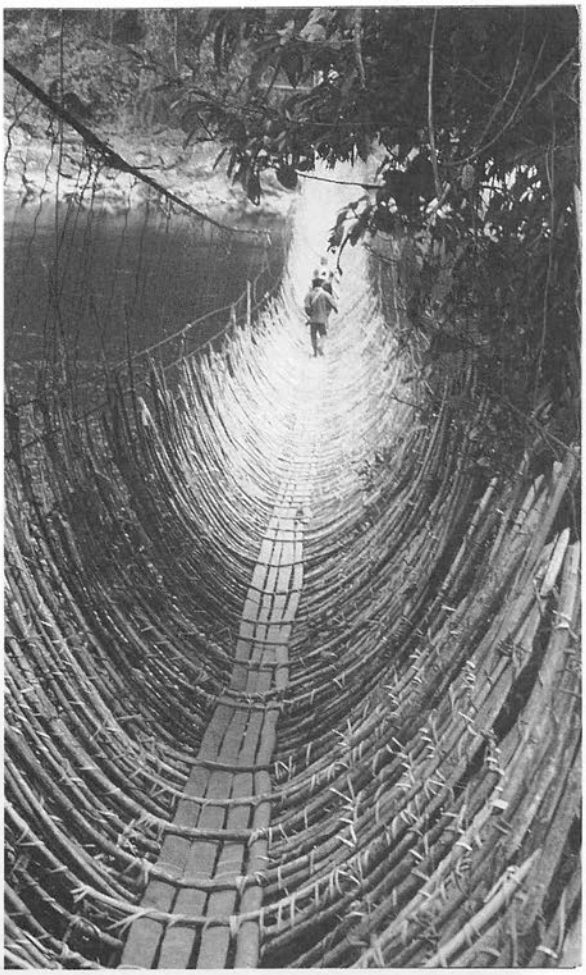
この集落には、上部に丸い板の付いた柱で支えた3階建ての木造の家が多くみられた。丸い板は鼠などの動物が家の中に侵入するのを防ぐ目的もあるらしい。

途中の村でパイナップルを沢山購入する。4個ほどで30ルピー(約100円)だった。早速、試食したが、大変甘くて美味しかった。

しばらく走り、シアン河のそばにあるイエブング(Yembung)のレストハウスで昼食をとった。イギリスが1911年に建てたレストハウスで、その後、1992年に増築したという。テラスからの眺めが良い。河原へ下りて行くことができる。下りてみると漁師がいて魚釣りの網を編んでいた。小舟もあった。河原一面にあるサラサラとした粉のような砂が、まるで雪が積もっているように見えた。それが静かに流れていく水を美しい透き通った青色に染めていた。そして、対岸の岩肌との間を悠々と流れ、視界から消えていった。

■アディ・ミョン族の集落

途中で、パンギン(Pangin)村でアディ・ミョン(Adi Miniyong)族を訪ねた。村人は豚と一緒に住んでいる。小学校にも寄った。ヒンディ語、



▲蔦と竹で作った長い吊橋

英語、算数、社会科を35分授業で午前午後の2部制で教えているという。天気の良い今日の教室は野外であった。

■パシガート

夕方早くパシガート(標高260m)に着いたので、夕食までバザール見物に行く。大きな四角形の広場のまわりに店舗が並んでいる。日用品は何でも売っている。野菜も豊富だった。ケーキ屋もあった。警官が要所々々に立っており、だんだん治安が悪くなっていくようである。夜間の外出はしないで欲しいとガイドもいっていた。

パシガートからディバン(Dibang Valley)のシキアン(Sikiang)川の上流のアミニ(Amini)までは車道はないが山道があり、また、ヘリポートもある。アミニからはアッサム・ヒマラヤが近くに眺められるという。

■ブラマプートラ河を下る

12月30日、ブラマプートラ河の河岸にあるタボ(Tabo)という名前の船乗り場に行く。ここからディブルガールまで、筏のような原始的なフェリーボートが出る。パシガートのホテルからタボまで40分ほどかかった。

船乗り場に着くと、すでに大勢の乗船客が待っていた。やがてフェリーボートがきて、役人の車を1台乗せ、続いてお客が乗った。船は岸を離れ、ブラマプートラ河を下るが、あちこちと深いところをさがしながら進むので時間がかかった。水が豊富にあるときはディブルガールまで4時間位だが、今日は7時間くらいかかるという。途中で一度、座礁したが、他の船に助けられて脱出し、ディブルガール側の下船場に午後2時頃に着いた。出迎えの車でディブルガールの町を通過し、野性動物園のあるカジランガ(Kaziranga)に泊った。

翌日、カジランガからガウハティに移動し、ブラマプートラ河畔にある国営ホテル「ブラマプートラ・アショック」に泊まった。1999年最後の夜は、ホテルの庭での新しい年を迎えるパーティに出席した。丸焼きの羊がこんがりと焼かれ、庭では飲み物、食べ物が沢山並べられ、無礼講で賑やかであった。夜中の12時が近づくにつれ、人々も増え、新しい年の始まりを楽しみ待ちわびていた。

新しい年の始まりは、花火が知らせてくれた。舞台と客席は一体となり、お互い抱き合い、握手して喜びを分かち合っていた。

■おわりに

数年もすれば、藤の木を輪切にしたものを鼻に嵌めたり、チョンマゲのように頭髪を束ねたりする独特の風習、竹造りの民家、カラフルな民族衣装などはアルナチャールから消えてしまうかも知れない。現に若い者は日本の若者とあまり変わりない服装をしていたし、新建材の民家も建ちつつあった。そうなる前にもう一度ゆっくりと旅したいと思った。

参考文献
(1)C.アレン著、宮持優（訳）：チベットの山、カイラスとインド大河の源流を探る、未来社、1988
(2)J.N.Chowdhury : Arunachal Panoroma, Navana Printing Eorks, Calcutta, 1973
(3)Verrier Elwin : The Art of the North-east Frontier of India, NEFA Pub. Shillong, 1959

◀幅20km近くあるブラマプートラ河

地域ニュース

《ネパール》

登山規則一部変更

登山隊のメンバーの追加及び変更の手続きは、観光省で行う「ブリーフィング」予定日の10日前までに完了しなければならない。仮に直前になって追加や変更があった場合は、その手続き終了後10日しないとブリーフィングが受けられない。このブリーフィングが終了しないとキャラバンをスタートさせることができない。

（情報提供：コスモ・トレック）

14歳、サガルマータを目指す

サガルマータの登頂を目指すネパールのシェルパ、テンバ・クヒリ君(14)が4月13日出発を前にカトマンズで家族から安全を祈るミルクの祝杯を受けた。同国の釈迦生誕記念日に合わせた5月18日を登頂予定日にしている。同君は昨年11月にイムジャ・ツェ(6,160m)の最年少登頂に成功した。

（2000.4.15　朝日新聞）

トピックス

事故と環境対策研修会開かれる

ＨＡＪとＨＡＴ－Ｊ共催の第７回　高所登山事故と環境対策研修会が、４月２日(日)豊島区民センターで開催された。同研修会は、昨年から環境部門についてはＨＡＴ－Ｊが担当しており、当日は、同会が改訂したテキストTAKE IN TAKE OUTが配布され研修。群大・斎藤繁ドクターによる体と高所障害の仕組みを学び、雪崩、クレバス転落などの事故例について学んだ。参加者55名。

労山創立40周年記念講演会

労山が創立されて40周年を迎え、記念行事の一環として「生と死の分岐点」の著者であるドイツのピット・シューベルト氏の講演会が開かれる。氏は現在国際山岳連盟安全対策委員長として活躍している。期日と会場は下記を予定している。尚前売券1500円（当日2000円）は、各登山用品店に用意されている。

記

東京：５月14日（日）　日本青年館（開場13：30）
札幌：５月15日（月）　札幌パークホテル
福岡：５月18日（木）　都久志会館ホール
京都：５月19日（金）　新・都ホテル
大阪：５月20日（土）　オーバルホール

第20回日本登山医学シンポジウム

20回目を迎えた「日本登山医学シンポジウム」が下記のとおり開催される。

記

1）主催：日本登山医学研究会
2）期日：2000年６月３日（土）～４日（日）
3）場所：東京慈恵会医科大学高木南講堂
〒105-8461　港区西新橋３-25-８
事務局：国立佐倉病院臨床検査科
☎043-486-1151　FAX043-486-8696
4）参加費：5000円　懇親会費：5000円
5）内容：メインテーマ「山登りの基本姿勢」
トレッキングメディスン（荻原理恵）　体力トレーニング効果について(山本正嘉)　運動生理学から見た筋肉疲労（馬詰良樹）　登山の現状と課題（柳沢昭夫）　ヒマラヤ登山の実態と予防対策（山森欣一）　山の姿かたちを読む（小疇尚）　ダイアモックスの功罪（浜口欣一関連発言／貫田守男／鈴木良二）　21世紀の山岳診療を模索して（滝沢正臣／斉藤三郎）

BOOKS

「ヒマラヤへの挑戦」

本会の監修による「ヒマラヤへの挑戦」がアテネ書房から刊行された。これは、日本隊による八千メートル峰の記録だ。本書はもともと1991年に「ケルン」の復刻版の別巻として制作されたため、当時は、非売品だった。したがってケルンを購入しなければ手に入れることができなかった。当時会員の方から強い希望があり、何回もアテネ書房

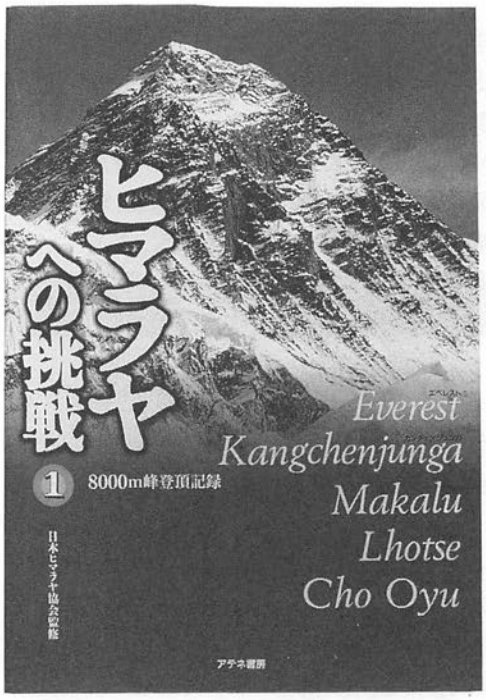
側に申し入れたが、実現しなかった。今回、その契約が切れて、ケルンとは独立して5巻に分けて販売される。

第1巻から3巻に収録されているのは、1956年マナスルの成功から日本隊最後の八千メートル峰登頂となった1985年チョー・オユーまでの「登頂成功隊」の報告書等からの抄録。

第1巻には、エベレスト、カンチェンジュンガ、マカルー、ローツェ、チョー・オユー。第2巻には、ダウラギリⅠ、マナスル、アンナプルナⅠ、シシャパンマ。第3巻には、K2、ナンガ・パルバット、ガッシャーブルムⅠ&Ⅱ、ブロード・ピークが収録されている。

4月中旬に第1巻が発売され、3ヶ月ごとに2～3巻が発売される予定。その後、第4巻として、1986年以降の成功隊。第5巻として、失敗隊の全部を予定しているが、4～5巻の発売予定は現在未定である。

本書の基本は、記録の正確を期するため、各登山隊が発行した報告書からの採録である。そのため各登山隊の報告書に対する編集方針がまちまちであるため、内容にばらつきがある。また、報告が文字化されていない隊については収録できなかった。



しかし、八千メートル峰登山の日本隊の記録のほとんどが纏まって見られることは貴重なことであるし、巻頭の32頁にもおよぶカラーも見応えがあり、ヒマラヤ・ニストとしては、座右に置きたい一冊である。

第一巻　A4判　338頁　別にカラー32頁
4200円＋税　2000年4月25日刊　アネテ書房
＊購入を希望される会員はHAJ事務局へ。

エベレストのぼらせます

マッキンリーの気象観測活動で活躍した大蔵喜福氏のハウツー本。わがまま登山のすすめ／心を鍛えるマインド登山／歩く解体新書／あなたにも登れます／格好よくスマートに山に行く／エベレストのぼらせます／などの項目から成っている。

1300円＋税　A5判　222頁
2000円5月1日　小学館

ヒマラヤから

ティリッツオ便り

先日はお忙しい中、壮行会へご出席頂き有り難うございました。又、事前準備におきましても、色々と便宜をはかって頂き有り難うございます。

予定通りカトマンズに着き、少しずつ準備を進めております。ご祝辞頂いたことを忘れずに、自分達の意志と力で楽しい登山を作りあげていきたいと思っております。

好山会ティリッツオ・ピーク登山隊一同

GⅡ便り

私達信州大学ガネッシュ・ヒマールⅡ峰登山隊の出発につきましては、多大なご協力をいただき、誠にありがとうございました。おかげさまで、3月22日、カトマンズに無事到着し、全員元気に準備活動に励んでいます。今後の予定は、4月1日キャラバンに出発し、4月10日より登山を開始したいと思います。安全第一にいってまいりますのでよろしくお願い申し上げます。

3月28日　カトマンズにて　隊員一同

チョモランマ便り（北海道）

今度のヒマラヤ遠征に際し、ご支援ご協力ありがとうございました。全員無事カトマンズに到着。隊員はみな元気です。プレ登山のパルチャモ峰に向け準備も整い３月12日ルクラへ飛び、いよいよ登山活動の開始です。エベレストが成功するよう高所順応に力を入れ頑張ってきます。遠い日本より登山の安全を願えれば幸いです。

北海道エベレスト登山隊2000　隊員一同

チョモランマ便り（東北）

おかげ様で１日早く４月14日にチョモランマＢＣに到着しました。ＢＣにはすでに15隊以上の登山隊が来ている様ですが、かなり広い所で東北、北海道の両隊が隣合わせにテント村を設置してもほんの一角です。法政大学隊は１日遅れです。

ＢＣは標高5,150ｍです。一晩過ごした今朝は、全メンバーとも多少の高度障害（頭痛など）はあるものの、顔のむくみなどは見られず、朝食のおじや、パン、卵焼きなど全員食べました。まずまずの状況です。

ヤクが来るのは17日の夜で翌日から輸送とＡＢＣへの移動が始まります。それまでは隊員達は付近の山を登ったり隊荷の整理などで過ごします。

中国登山協会の連絡官は、金俊喜さんと言い私の1986年のチベット登山で一緒だった人で、再会を喜び、友好的に進めております。登山隊は大きな問題はなく、順調に進んでおり、ご安心ください。

４月15日　テントから顔を出すと「チョモランマの雄姿が仰げる」ＢＣより

東北チョモランマ登山隊隊長　八嶋　寛

東京集会のお知らせ

日　時　５月29日（月）午後７時～
内　容　「ヒマラヤへの挑戦」について
場　所　ＨＡＪルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車４番出口から地上に出て右へ徒歩２分）又は、ＪＲ大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面２つ目の東池袋４丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩２分）

山の情報誌「岳人」

GAKUJIN
岳人

毎月15日発売（日・祝日の場合は前日）定価700円

■本誌の年間購読ご案内
本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。
直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。
郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。
お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

2000年	特　集
★ 1月号	雪山入門　日本の山を楽しむために
2月号	現代山岳スキー　思想・用具・記録
★ 3月号	日帰り縦走、ひと味違うハイキング
4月号	日本列島、恵みのブナの森を訪ねて
★ 5月号	陽光の日本アルプス
★ 6月号	日本全国、知られざる花の名峰
7月号	夏こそ、海と島の山旅
8月号	はるかなる源流の峰々へ
9月号	一度は泊まろう静寂の山小屋
★10月号	紅葉のみちのくの山並み
11月号	冒険、修験、岩塔の山
12月号	野生動物と出会う山

（★は特大号・800円となります）

東京新聞出版局（中日新聞東京本社）〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674（直）
全国の書店で発売中／中日新聞販売店でも取りつぎます

1952－1999年＝48年間

日本隊ヒマラヤ登山と遭難

山森　欣一

Ⅰ．日本隊ヒマラヤ登山の概観

1952年、戦後日本初のヒマラヤ登山隊が、ネパール・ヒマラヤのマナスル峰の偵察に向かった。それから昨年（1999年）で満48年となり、この間に標高六千メートル以上の峰を目指してヒマラヤ地域に入山した岳人は1,569隊・11,221名となった。

ヒマラヤ登山における日本人の活躍はめざましく、1956年のマナスル峰初登頂を皮切りに、数多くの魅力的な七千～六千メートル峰の初登頂に成功し、八千メートル峰14座全てに登頂するとともに、74年には世界で女性初の八千メートル峰登頂（マナスル）、75年女性初のエヴェレスト登頂にも輝いた。また、神々の座「ヒマラヤ」の中でも岳人の憧れる「八千メートル峰登頂者」も実人数で339名となった。

一方、このような栄光を手放しで喜べない現実もある。1961年ネパール・ヒマラヤのランタン・リルン（7,225m）を登山中の大阪市立大学隊が、懸垂氷河雪崩のため遭難したのが、ヒマラヤにおける日本初めての死亡遭難事故となったが、それ以降不幸にして遭難死した登山者は149隊、254名にも達し、68年から99年まで32年間とぎれること無く死亡事故が発生しており、本邦岳人にとっては不名誉な記録を更新し続けているのである。

また、標高六千メートル未満の峰の登山とトレッキング中に死亡した人も42件・61名に達しており、この内の38%、23名が雪崩、35%、22名が高山病による死亡者なのである。

Ⅱ．遭難事故防止のためのデータ整理の動機

1978年6月20日は、私にとって一生忘れることのできない日となってしまった。それは、私が副隊長として参加した山嶺登高会の遠征〔カラコルム、バトゥラ山群の未踏峰ハチンダール・キッシュ（7,163m）〕で、巨大な岩稜を突破し頂上に肉薄したものの、時間切れのため無念の涙を飲んでBCへ帰る途中、固定ロープ切断が原因とみられる事故のため、前途洋々の後輩、亀井建樹隊員（27）が墜死してしまったからである。

私は、仲間の死を切っ掛けに「事故が起きてから反省しても死者は蘇らない」という真実を思い知らされた。それ以後機会をみては、ヒマラヤ登山計画を進めている岳人の集会で「ヒマラヤ登山の事故の確率は高く、必ず我が身に起きること、過去の事故隊の反省は真剣に検討する価値があること」を説いた。

しかしながら、言葉は虚しく空を切るだけであった。それは、登山を実践する多くの岳人が「自分の隊に限って事故が起きる事はあるまい」と、錯覚しているためであった。そのような雰囲気を打破し、彼等を説得するには「ヒマラヤ登山の事故の実態を客観的な数字によって示すしかない」と思い立ち、日本隊の実態をまとめ、80年に開催された日本山岳協会の「第一回海外登山遭難対策研修会」にデータを発表した。（岳人402号 1980年12月号参照。）

Ⅲ．データの基本は、六千メートル以上の峰

今日のヒマラヤ地域には、登山とトレッキングを中心に標高四千メートル以上の高所に多くの岳人々が入山しており、その正確な数を把握する事は至難である。一方、死亡者の数はほぼ完全に把

握することが可能である。

このような啓蒙を目的としたデータは、使用するには客観性がなければ多くの岳人の賛同を得ることは出来ず、したがってここで期待する「ヒマラヤ登山死亡事故の減少＝ヒマラヤの安全登山」を実現することは難しい。

このため、データの基本となる数字は、入山者数を把握することの可能な「標高六千メートル以上の峰を目指した隊」に置いた。当然のことながら死亡者数も対象として取り上げた隊での死亡者に限定した。

裏付けのあるデータの効果はてきめんであった。それまでは漠然と「ヒマラヤ登山は怖い」と感じていた岳人たちは、入山者の40名に一人が死亡している現実を知らされたのである。このため研修を受ける態度もかなり変わってきた。そして今では、日本からヒマラヤへ向かう登山者にとって、「死亡率２．３％」は、何とかしなければならない数字として定着している。このため2000年の日本ヒマラヤ登山界の合い言葉は、

「ストップ・ザ３３」である。

Ⅳ．死亡事故原因の二大要素は、雪崩と高所障害

死亡事故の原因をみると、雪崩による死者が254名中、125名と最も多く、これに落石、氷、風、雷の９名を加えた134名がいわゆる「気象要因」による遭難死であり全体の52.8％を占めている。

事故原因の転滑落や疲労凍死は、そのほとんどがかなり高い比率で高所の影響を受けた結果と想定することが出来るので、これらに高山病を加えた106名がいわゆる「高所要因」による遭難死であり41.7％を占めている。残る14名の行方不明者も雪崩か転滑落と想定される。

こうしてみると「ヒマラヤ」における遭難事故の原因が**「気象」**と**「高所」**が相半ばしていることは歴然である。

Ⅴ．雪崩事故の防止対策

1990年代の10年間における死亡遭難事故件数35隊の内、37％にあたる13隊が雪崩の事故であり、死者71名の内、雪崩による死者はその内の44名、実に62％を占めている。

90年代に入って、一原因の雪崩によって、梅里雪山11名、ニルカンタとスキル・ブルム各６名、ミニヤ・コンカ４名などの大量死亡事故が発生している。（表では行方不明としたが、98年のガッシャーブルムⅠの４名も雪崩の可能性を否定できない。）

この現実は、従来から言われ続けている**「雪崩事故は大量遭難につながる」**との説を裏付ける結果となっている。

雪のついていない岩壁登攀をめざす登山以外、通常のヒマラヤ登山は、雪山の登山である。雪崩の危険を察知する能力は、雪のある山の現場経験の積み重ね無くしては習得出来ない。その能力は、冬山登山を数多く実践してこそ身に付く筈である。

書物によって雪崩の発生理論を机上で学ぶことや、日常的な身体機能向上のためのトレーニングは、ヒマラヤ登山の実践には欠かせないことであるが、それだけではこと足りない。

大自然界の中で発生している雪崩には様々な形態があると想像され、人間が把握し、解明している雪崩現象はその内のごく僅かな例に過ぎない。それぞれの山の現場の地形やその時の気象条件が異なる以上、数多くの地形、気象、雪のコンディションを経験してこそ、その知識が生かされてくる筈である。さらにヒマラヤは、日本の山岳とはスケールが違うこともある。

80年代以降地球の温暖化が叫ばれており、ヒマラヤの自然にもその影響が現れ始めている。このことは、ルートの選定などに大きく影響する。古い時代の報告書などを鵜呑みすると危機を招く恐れが十分にある。特に懸垂氷河の崩落についてはまだまだ解明されていないことが多いので、判断を一体験者の報告だけに頼ることは避けるべきである。多くの情報を収集することが肝要であろう。

身体トレーニングの時間が多くなり、そのことによって冬山登山が少なくなるようなことは、ヒ

マラヤ登山にとっては本末転倒と言えるだろう。

どのような素晴らしい体力（スピード）を備えていても、それだけで悪天をカバーできる程、自然は甘くないことを謙虚に考える必要があるだろう。

Ⅵ. 高所障害事故の防止対策

高所の生理については、この分野で様々な研究成果が発表されつつあり、これら高所に造詣の深い諸先生方の力作を丹念に勉強することによって、多くの知識を学ぶことが出来る。また、登山者の失敗例も数多く報告されており貴重な資料となっている。これらの事例を積極的に収集し勉強することが第一である。

高所障害は、地球の仕組みと人間の体の仕組みによってもたらされるものである。自分の体の仕組みがどのようになっているのかを知っておくことが、高度障害を理解する上で大切である。

高所の影響で現れる初期症状は、あって当たり前と考えておく必要がある。過剰な不安を持つことはマイナスである。一人ひとりの顔が違うように、高所の影響を受ける身体にも程度の差がある。その折の体調・精神状態によっても差が出て来る。高所の影響も３人いてもまるっきり同じでないのが普通である。

高所障害の実態については、多くの経験者に体験談を聞くことが望ましい。地方にいると経験者が少ないため、体験談を聞く機会が少ないと思うが、一人の体験談を聞いてそれを鵜呑みにすることは避けたい。

一般的な極地法を用いてヒマラヤ登山を実践する場合のターニング・ポイントとして、アタック前の「**ベース・キャンプでの休養**」を取り入れることを勧めたい。机上で計画したことを現場で忠実に実行出来ることが、極地法の成功への道である。しかし、気象条件やルートの見込み違い、メンバーの体調などによって机上の計画と狂いが生じることが多い。その結果、登山の最終段階になるとそれまでに消化出来なかったツケが回ってくる。アタック態勢が整っているのかどうかの見極めが大切である。長期の登山では高所順応がうまく獲得できていても、少なからず蓄積された疲労は残っている。アタックの前にＢＣに降りて、この蓄積疲労を解消すると共に態勢をチェックすることも大切だ。アタック態勢が整っていて一旦ＢＣに降りて休養すると、上部のルートが放置されるリスクはある。これには目をつぶる。休養中に天候が悪化した場合は、アタックを諦める。

登山終盤になると、修正に修正を重ねて来た登山活動には目に見えない疲労や無理が潜んでいる。しかし、頂上は確実に近くなり、何とかアタックを！と考えるのは、登山者共通の意識なのかも知れない。しかし、蓄積疲労を残したまま、或いは不完全な態勢のまま、一発勝負でアタックを敢行するのは下策である。仮に幸運が味方してその時は成功しても、次では事故につながることもある。先人の貴い死がそれを教えている。

この観点から1993年チョモロンゾ（7816m）に登頂した立教大学隊の若い隊員に拍手を送りたい。ことはこうである。ＢＣの隊長（49）から上部で行動中の若手隊員（26）に、「天候がもたないから調子のいい者で、明日一回目のアタックをかけるよう」指示が出た。それに対して、若手は事前に決まっていた「アタック前のＢＣでの休養」を訴え、結局ＢＣに降り休養後アタックに入り困難を克服して登頂に成功したのである。（同隊報告書「白き咆哮・Ｐ105より」）

アタック時の状況からして、休養なしのアタックを敢行していたならば相当厳しい結果となったものと想像される。標高零メートルの国内での約束を忘れずに、現場でキチンと主張できたとは、なんと素晴らしいことであるか！

Ⅶ. 高所障害の多いトレッキング

参考として別表に五千メートル級の登山とトレッキングで起きた事故の死亡者も纏めた。これらは入山者数を把握することが不可能なので指数は分からない。

トレッキングでは、圧倒的に中高年層の高所障害による死亡者が多いことが目に付く。このことについては、トレッカー自身の身体的、精神的な問題は勿論あるが、送り出す側とトレッカー自身の「高所医学」についての初歩的な知識の欠如をも見逃す事はできないだろう。

本格的な登山を目指している岳人には、少ないながらも高所医学の基礎知識や障害の実態を学ぶ場が開かれている。しかし、極端に言えば、若い頃少々山歩きをし、余裕の出てきた中高年になって、憧れていたヒマラヤの大自然・山岳美を一目見ようとやってくるトレッカー達には、高所医学の知識を学ぶ場や機会すらないのが実情である。

このような立場の山岳愛好者達の安全確保を、単に商売だからと旅行会社に委ねておいてよいものであろうか？。高所の分野に何等かの関わりを持つ者たちが一致協力して、まだまだ未知の分野である「高所医学」の解明に努力し、合わせて高所医学の基礎的な知識の普及を行うことが必要であると思う。現状では科学者である医師が積極的に解明・普及の牽引者の役割を担って欲しいと願わずにはいられない。

Ⅷ. ヒマラヤ登山事故の背景にあるもの

日本では制限付きながら外貨を自由化したのは、1965年のことであったが、それ以降経済の高度成長をみた70年代に登山界も大きな影響を受けた。それまでの欲求不満を一挙に解消せんとするかのごとく、アルプス登山やヒマラヤ登山が続いた。だがこれらの狂騒状態が一段落する前後から一部の登山者達は、「登山の自然への回帰＝シンプル登山」を主張し実践し始めた。岩登りにおけるフリー化、高所登山におけるアルパイン・スタイル、ヒマラヤ登山の無酸素登山等がそうである。

物事は、いつの時代でもどの分野でも主流を時代遅れ・保守的とすることによって発展してきた。登山界も例外ではなかった。登山の自然への回帰を叫び実践した先蹤者達には、実践を通して時を見つめ今、登山はどうあるべきか、何が必要なのかの確固たる信念（精神・思想）があり、それに基づいて実践し続けた。

だが、一度シンプル登山が登山者の共鳴を得ると、それは言葉だけが独り歩きし定着し、魂のない形だけが模倣されることが多くなった。その結果ボルトやハーケンを連打する以上のおびただしいナッツ類を使用したフリー・クライミングが流行ったり、コストが安ければシンプルでありライトＥＸＰである、というような登山（コピー登山者）がはびこる結果となった。

一方、登山はスポーツか？の議論は以前から活発に行われているが、登山をスポーツと考え主張する側は、登山行為をスピード化することが、最大の関心事となり、スピードゆえにもたらされる結果として「休暇が少なくて済む、コストを安くすることが出来る、危機に晒される時間が少ないので安全である」等を掲げることによって、社会的に価値が大きい事を主張する。このため、心肺機能や筋機能の向上を中心としたトレーニングがクローズ・アップされ、以前の登山者に比べると現在の若い登山者は、下界でのトレーニング量は格段に増加したと言える。

トレーニング量の増加そのことは、登山者として素晴らしいことである。逆に自然・山を舞台にしたトレーニングは少なくなっている。前述したようにヒマラヤ登山は、雪山登山である。雪山に親しむ量が減ったのでは、危険を察知する能力を鍛えることが出来ない。

しっかりしたリーダーによって組織された隊であるのか、束縛を嫌い気のあった同志の隊であるのか、ベテランなのかビギナーなのか、若いのか、中高年なのか、自己責任でやってきたのか観光気分で来たのか、有名か無名か、

「ヒマラヤの大自然はそれを知らない」

誰もがヒマラヤの素晴らしさにひかれて頂を目指し、その大自然は誰分け隔てること無く受け入れてくれる。

「光となるか影となるかは、
一人ひとりの心の中にある」

日本隊のヒマラヤ登山と死亡事故調査(1952年～99年・48年間)

(標高6,000m以上の峰を目指した隊を対象とした)

(表1．集計表)　上段：入山者、下段：死亡者。左欄：隊数、右欄：人数。％＝入山者に対する死亡率。

年代 / 目標高度	1952年～59年		%	1960年～69年		%	1970年～79年		%	1980年～89年		%	1990年～99年		%	合　計		%
8000m峰	4	36	0	6	46	0	29	431	4.2	103	1042	3.1	169	1068	1.6	311	2623	2.6
	0	0		0	0		9	18		21	32		13	17		43	67	
7000m峰	9	62	0	40	264	1.9	147	1309	2.1	215	1552	2.8	202	1237	2.5	613	4424	2.4
	0	0		4	5		19	280		28	44		15	31		66	108	
6000m峰	5	28	0	39	213	1.4	134	908	2.4	291	1830	1.7	176	1195	1.9	645	4174	1.9
	0	0		3	3		12	22		17	31		7	23		39	79	
合　計	18	126	0	85	523	1.5	310	2648	2.6	609	4424	2.4	547	3500	2.0	1569	11221	2.3
	0	0		7	8		40	68		66	107		35	71		148	254	

(注) 入山者については、主に90年代に入ってネパールのトレッキング許可ピークについては、ほとんど把握できていない。よって入山者の総数は増える可能性がある。

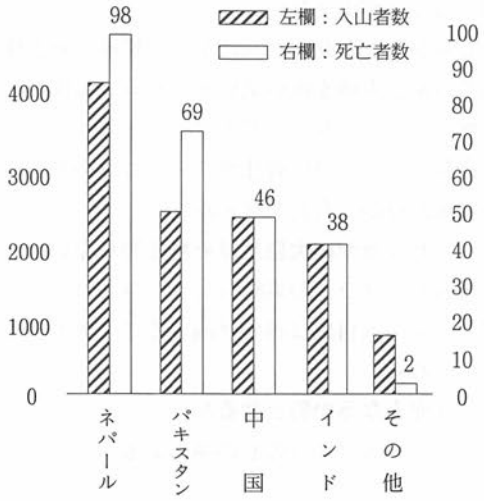
(表2．入山者数内訳表)

2-1 地域別

国　名	人数	%
ネパール	4028	35.9
パキスタン	2421	21.6
中　国	2278	20.3
インド	1936	17.3
旧ソビエト	472	4.2
ブータン	86	0.8
合　計	11221人	

2-2 年代別

年　代	人数	%
1950年代	126	1.1
1960年代	523	4.7
1970年代	2648	23.6
1980年代	4424	39.4
1990年代	3500	31.2
合　計	11221人	



地域別：入山者と死亡者

2-3 目標山岳高度別（年代別内訳）

高　度	人数	%	(50)	(60)	(70)	(80)	(90)
8000m峰	2623	23.4	36	46	431	1042	1068
7000m峰	4424	39.4	62	264	1309	1552	1237
6000m峰	4174	37.2	28	213	908	1830	1195
合　計	11221人		126	523	2648	4424	3500

2－4　8000m峰入山と死亡表

山名	入山者	登頂		死亡		死亡原因			
		人数	率	人数	率	雪	滑	病	他
エヴェレスト	610	70	11.8	13	2.2	2	2	6	3
K2	222	39	17.6	3	1.4	0	0	2	1
カンチェンジュンガ	134	36	25.0	3	2.2	0	2	1	0
ローツェ	63	12	19.0	0	0	0	0	0	0
マカルー	84	19	22.6	1	1.2	0	0	0	1
チョー・オユー	205	91	44.4	1	0.5	0	1	0	0
ダウラギリⅠ	253	45	17.8	8	3.2	5	1	1	1
マナスル	185	27	14.6	5	2.9	1	1	2	1
ナンガ・パルバット	235	28	11.9	12	5.4	8	0	3	1
アンナプルナⅠ	118	7	5.9	10	8.5	7	0	3	0
ガッシャーブルムⅠ	112	25	22.3	4	3.6	0	0	0	4
ブロード・ピーク	114	46	40.4	1	0.9	1	0	0	0
ガッシャーブルムⅡ	117	47	40.2	4	3.7	0	1	3	0
シシャパンマ	171	53	30.1	2	1.3	2	0	0	0
合　計	2623	547	20.5	67	2.6	26	8	21	12

（表３．死亡者数内訳表）

3-1 地域別

国名	人数	%
ネパール	98	39.0
パキスタン	69	27.2
中国	46	18.1
インド	38	15.0
旧ソビエト	2	0.8
ブータン	0	0.0
合計	254人	

3-2 原因別

原因	人数	%
雪崩	125	49.2
転滑落	79	31.1
高山病	20	7.9
行方不明	14	5.5
疲労凍死	7	2.8
落石・流氷	6	2.4
その他	3	1.1
合計	254人	

3-3 目標山岳高度別（年代別内訳）

高度	人数	%	(50)	(60)	(70)	(80)	(90)
8000m峰	67	26.4	0	0	18	31	18
7000m峰	110	43.3	0	5	30	45	30
6000m峰	77	30.3	0	3	20	31	23
合計	254人		0	8	68	107	71

（表４．死亡者、原因別・地域別・高度別）

		ネパール	パキスタン	中国	インド	旧ソ連	合計
雪崩	8000m峰	13	9	4	0	0	26
	7000m峰	21	19	11	1	0	52
	6000m峰	7	8	11	21	0	47
	小計	**41**	**36**	**26**	**22**	**0**	**125**
転滑落	8000m峰	11	7	3	0	0	21
	7000m峰	17	12	9	2	1	41
	6000m峰	10	4	0	3	0	17
	小計	**38**	**23**	**12**	**5**	**1**	**79**
高山病	8000m峰	6	1	1	0	0	8
	7000m峰	2	2	1	1	1	7
	6000m峰	3	1	0	1	0	5
	小計	**11**	**4**	**3**	**2**	**1**	**20**
その他	8000m峰	6	5	1	0	0	12
	7000m峰	1	1	4	4	0	10
	6000m峰	2	0	1	5	0	8
	小計	**9**	**6**	**6**	**9**	**0**	**30**
総合計	8000m峰	36	22	9	0	0	67
	7000m峰	41	34	25	8	2	110
	6000m峰	22	13	12	30	0	77
	合計	**99**	**69**	**46**	**38**	**2**	**254**

（表５．死亡者、発生年代別・年令別・高度別）

		60年代	70年代	80年代	90年代	合計
二十歳代	8000m峰	0	8	10	6	24
	7000m峰	0	26	22(1)	12	60(1)
	6000m峰	5	9(3)	15(1)	8	37(4)
	小計	**5**	**43(3)**	**47(2)**	**26**	**121(5)**
三十歳代	8000m峰	0	10(1)	15	5	30(1)
	7000m峰	0	7	22	5(1)	34(1)
	6000m峰	1	5	16(3)	9	31(3)
	小計	**1**	**22(1)**	**53(3)**	**19(1)**	**95(5)**
四十歳代	8000m峰	0	0	6	6(1)	12(1)
	7000m峰	0	2	1	8	11
	6000m峰	2	1(1)	0	5	8(1)
	小計	**2**	**3(1)**	**7**	**19(1)**	**31(2)**
五十歳代	8000m峰	0	0	0	1	1
	7000m峰	0	0	0	5	5
	6000m峰	0	0	0	1	1
	小計	**0**	**0**	**0**	**7**	**7**
総合計	8000m峰	0	18(1)	31	18(1)	67(2)
	7000m峰	0	35	45(1)	30(1)	110(2)
	6000m峰	8	15(4)	31(4)	23	77(8)
	合計	**8**	**68(5)**	**107(5)**	**71(2)**	**254(12)**

※50歳代には60歳代２人が含まれている。

（表６．死亡者、高度別・原因別）

高度／原因	8000m峰 人数	8000m峰 %	7000m峰 人数	7000m峰 %	6000m峰 人数	6000m峰 %	合計 人数	合計 %
雪崩	26	20.8 38.8	52	41.6 47.2	47	37.6 61.0	125	100.0 49.2
転滑落	21	26.6 31.3	41	51.9 37.3	17	21.5 22.1	79	100.0 31.1
高山病	8	40.0 11.9	7	35.0 6.4	5	25.0 6.5	20	100.0 7.9
行方不明	6	42.9 9	3	21.4 2.7	5	35.7 6.5	14	100.0 5.5
疲労凍死	3	42.9 4.5	4	57.1 3.6	0		7	100.0 2.8
落石・氷	0		3	50.0 2.7	3	50.0 3.9	6	100.0 2.4
風・雪	3	100.0 4.5	0		0		3	100.0 1.2
計	67	26.4 100.0	110	43.3 100.0	77	30.3 100.0	254	100.0 100.0

（注）％＝上段は高度別、下段は原因別の割合。

（表６．死亡事故隊一覧表）

年	山　名	標高(m)	国	人数	成否	事故原因内訳 雪	滑	病	他	死亡合計
六一	ランタン・リルン	7225	N	6	×	2				2
六四	ギャチュン・カン	7952	N	11	●		1			1
六五	クンヤン・チッシュ	7852	P	13	×	1				1
六八	コー・イ・バンダカー	6843	P	7	○		1			1
	南アトラック・ゾム	6241	P	4	●		1			1
	シックル・ムーン	6574	I	4	×		1			1
六九	イストル・オ・ナール	7403	P	5	×		1			1
1952年～1969年小計						3	5			8
1952～1969＝18年間、103隊649人中、7隊8人死亡。死亡率1.2%（雪崩死亡占有率37.5%）										
一九七〇	サガルマータ	8848	N	29	○			1		1
	ガディ・チュリ	7871	N	9	●		1			1
	ツクチュ・ピーク	6920	N	17	○		1			1
	バ　ウ　ダ	6672	N	7	●		1			1
一九七一	アンナプルナⅡ	7937	N	11	×		1			1
	カンシュン・ツェ	7678	N	9	×			1		1
	ダウラギリⅤ	7618	N	8	×		3			3
	ダウラギリⅤ	7618	N	10	×	1				1
	ガンガプルナ	7454	N	10	○	3				3
	ウドレン・ゾム南峰	7058	P	5	○		1			1
一九七二	マナスル	8163	N	1	×	1				1
	ダウラギリⅣ	7661	N	9	×			1		1
	ナ　ン　パ	6755	N	5	●		1			1
	ディオ・ティバ	6001	I	?	?			1		1
一九七三	ヤルン・カン	8505	N	15	×		1			1
	アンナプルナⅠ	8091	N	11	×	4				4
	プタ・ヒウンチュリ	7246	N	8	×	2				2
	キュン・カリ	6578	N	5	×	3				3
一九七四	マナスル	8163	N	10	○		1			1
	K12	7468	P	5	●		2			2
	ブニ・ゾム北峰	6338	P	3	×		1			1
一九七五	ダウラギリⅠ	8167	N	17	×	2				2
	ダウラギリⅤ	7661	N	16	●		2			2
	カンジロバ	6883	N	7	×		1			1
	マルビティン中央峰	7260	P	10	●		1			1
	シックルムーン	6574	I	11	×				1	1
一九七六	ガッシャーブルムⅡ	8035	P	13	×		2	1		3
	ラトックⅠ	7145	P	12	×		1			1
	ホワイトセール	6455	I	4	×		1			1
一九七七	ヒマルチュリ	7893	N	14	×	1				1
	バトゥーラⅠ	7785	P	11	×	1				1
一九七八	ダウラギリⅠ	8167	N	13	○			1		1
	ダウラギリⅠ	8167	N	18	○	3	1			4
	ガディ・チュリ	7871	N	10	×	3				3
	ジュトマル・サール	7330	P	9	×	3				3
	ハチンダール・キッシュ	7163	P	7	×		1			1
	ガッシャーブルムVE	6900	P	12	○		1			1
一九七九	ヒウン・チュリ	6441	N	7	×	2				2
	テラム・カンリⅢ	7382	P	12	●		1			1
	ゴーカール・サール	6249	P	15	×	6				6
1970年～1979年（70年代）						35	26	6	1	68
1970～1979＝10年間、310隊2648人中、40隊68人死亡。死亡率2.6%（雪崩死亡占有率51.5%）										
一九八〇	チョモランマ	8848	C	26	○	1				1
	アンナプルナⅡ	7937	N	6	×		1			1
	ガネッシュ・ヒマールⅡ	7111	N	12	×	3				3
	パルチャモ	6187	N	7	○		2			2
一九八一	コングール	7719	C	20	×				3	3
	ミニヤ・コンカ	7556	C	24	×		8			8
	サガルマータ	8848	N	17	×		1			1
	アンナプルナⅠ	8091	N	12	○		1			1
	アンナプルナⅡ	7937	N	9	×		1			1
	ガンガプルナ	7454	N	6	×	2				2
	ガッシャーブルムⅣ	7980	P	5	×	3				3
	ク　ン	7077	I	10	×			1		1
	パンワリ・ドワール	6663	I	9	×	1				1
	ジャオンリ	6632	I	5	×	3				3
	ナンダ・カート	6611	I	8	×	7				7
	ホワイト・セール	6446	I	3	×				3	3
一九八二	チョゴリ	8611	C	45	○		1		1	2
	ミニヤ・コンカ	7556	C	7	×				1	1
	ミニヤ・コンカ	7556	C	6	×			1		1
	ポーロン・リ	7292	C	14	●		1			1
	サガルマータ	8848	N	9	○				2	2
	マナスル	8163	N	10	×		1			1
	アンナプルナⅠ	8091	N	3	×	2				2
	アンナプルナⅢ	7555	N	11	×	1				1
	パスー	7284	P	7	×					1
	ヌン	7135	I	5	○				1	1
	クン	7077	I	17	×				1	1

一九八三	サガルマータ	8848	N	5	○		2			2
	ヒマルチュリ	7893	N	9	×		2			2
	チャマール	7187	N	8	×	1				1
	ピサン・ピーク	6091	N	2	×			1		1
	ナンガ・パルバット	8126	P	17	×	3				3
	ナンガ・パルバット	8126	P	11	×	1				1
一九八四	ナンガ・パルバット	8126	P	4	×	4				4
	ナンガ・パルバット	8126	P	9	×		1			1
	クン	7077	I	4	○	1				1
	シヴリン	6543	I	6	○				1	1
一九八五	チョモランマ	8848	C	11	×	1				1
	グルジャ・ヒマール	7193	N	9	○		1			1
	ガウリシャンカール	7134	N	2	×		1			1
	アマ・ダブラム	6812	N	5	○		1			1
	クワンデ	6011	N	2	×		1			1
	ガッシャーブルムⅡ	8035	P	1	×		1			1
	ケダルナート	6968	I	6	×	1				1
	テレイ・サガール	6904	I	3	×		1			1
一九八六	ヒマルチュリ	7893	N	7	○		1			1
	タウチェ	6501	N	6	×		1			1
	メラ・ピーク	6473	N	1	×			1		1
	クワンデ	6011	N	2	×		2			2
	ディラン	7257	P	7	×		1			1
	チリン東峰	7090	P	10	×		1			1
	クン	7077	I	5	○		1			1
	メルー北峰	6450	I	5	×	3				3
一九八七	チョモランマ	8848	C	24	×		1			1
	マナスル	8163	N	15	×			1		1
	アンナプルナⅠ	8091	N	14	○		2			2
	メラ・ピーク	6473	N	9	×	1				1
	K2	8611	P	12	×		1			1
	クンヤン・チッシュ	7852	P	6	×				1	1
一九八八	サガルマータ	8848	N	16	×			1		1
	アンナプルナⅠ	8091	N	8	×	1				1
	ギャチュン・カン	7952	N	11	×		1			1
	サニ・ポククシュ	6885	P	6	×			1		1
一九八九	ランタン・リルン	7225	N	12	×	3				3
	ナンガ・パルバット	8126	P	17	×				1	1
	ハン・テングリ	7010	S	15	○		1			1
1980～1989年（80年代）						43	41	8	15	107

1980～1989＝10年間、609隊4424人中、66隊107人死亡。死亡率２．４％。（雪崩死亡占有率28.0%）

一九九〇	トムール	7439	C	14	×	3				3
	クラウン	7295	C	7	×	2				2
	プモ・リ	7161	N	4	×		1			1
	ナンガ・パルバット	8126	P	9	○		1			1
一九九一	チョモランマ	8848	C	2	○		1			1
	シシャパンマ	8027	C	17	×	2				2
	ナムチャ・バルワ	7782	C	15	×	1				1
	メイリーシュエシャン	6740	C	11	×	11				11
	マカルー	8463	N	6	○				1	1
	クスム・カングル	6369	N	1	?				1	1
	ウルタルⅡ	7388	P	9	×	2				2
一九九二	チョモランマ	8848	C	11	×		1			1
	クラウン	7295	C	11	×	1				1
	ヤズギル・ドーム南峰	7440	P	5	×		1			1
一九九三	サニ・ポククシュ	6885	P	5	×	2				2
	トゥインズ	7350	I	14	×		1			1
	ニルカンタ	6596	I	7	×	6				6
一九九四	ミニヤ・コンカ	7556	C	7	×	4				4
	ウルタルⅡ	7388	P	5	×		1			1
	トゥインズ	7350	I	8	×				2	2
一九九五	チャクラギール	6772	C		×				1	1
	ダウラギリⅠ	8167	N	6	○				1	1
一九九六	チョー・オユー	8201	C	6	×			1		1
	サガルマータ	8848	N	1	○				1	1
	マナスル	8163	N	6	○				1	1
	イムジャ・ツェ	6160	N	6	?			1		1
	ウルタルⅡ	7388	P	2	●				1	1
一九九七	イムジャ・ツェ	6160	N	1	?				1	1
	ブロード・ピーク	8051	P	14	×	1				1
	スキル・ブルム	7360	P	16	○	6				6
一九九八	カンチェンジュンガ	8586	N	9	○			2		2
	ナンガ・パルバット	8126	P	4	×		1			1
	ガッシャーブルムⅡ	8035	P	4	?				4	4
	レーニン	7134	S	4	○			1		1
九九	パトゥラⅠ	7785	P	5	×	3				3
1990～1999年（90年代）						44	8	5	14	71

1990～1999＝10年間、547隊3500人中、35隊71人死亡。死亡率2.0%。（雪崩死亡占有率62.0%）

1952－1999年＝48年間、1569隊11221人中、148隊254人死亡。死亡率2.3%。（雪崩死亡占有率49.2%）。

（注）外国人の死亡は除外した。国の略は、N＝ネパール、C＝中国、P＝パキスタン、I＝インド。

最も困難な山・K 2 (8,611m)

中川　裕

世界で最も高い山の名前は世間一般の常識かもしれないが、世界第二の高峰となると知名度は格段と低くなる。日本ヒマラヤ協会会員ならよくご存知のとおり、エベレストが最も多くの人に登られた8千メートル峰になったのに対して、第二峰のK 2は最も困難な8千メートル峰という評価を世界の登山者から得て、今日に至っている。

英国に住むXavier Eguskitzaが8千メートル峰の登頂後の遭難、いわゆる帰り×(バツ)についてのデータを公表した。結果は別表の通りである。1954年のイタリア隊による初登頂から現在まで、K 2登頂者の数は164名。チェコのラコンチャイが2度登っているので実質163名となる。エベレスト登頂者数の6分の一以下だ。K 2登頂後の遭難者数は22人で13%。2位のアンナプルナの5.9%を大きく引き離して第一位。その理由について、Eguskitzaは行動用酸素の使用との因果関係をあげている。

K 2登頂者の内およそ3分の2が行動用酸素を使用していない。遭難した22名は全員無酸素での登頂であった。明暗を分けた理由は酸素の使用、不使用と明快に示されている。ところがエベレストでは酸素ボンベを使用して登った内の9.8%が遭難。無酸素のそれが2.4%に較べると4倍以上になっているという。この違いが何を意味するのだろう。

一つにはエベレストを酸素ボンベの助けをかりずに登る事は、K 2を同じように登る事にくらべて困難度が高く、非常に限られたクライマー達の世界となっている事が、下山中の事故率の低下に結びついていると考えられる。そして「計算が出来ない人間には有酸素登山は出来ない。」といわれるとおり、K 2より200メートル以上高いエベレストでは酸素ボンベの残量と登高スピード、ルート状況などを総合して判断する能力がK 2以上に要求されている。それが酸素ボンベを背負った登頂者の9.8%が遭難したという結果にあらわれているのだろう。

また、酸素を使用しない登山では、必然的に荷上げ量や、行動に限界が生じるために、固定ロープ等の安全対策を十分に施せない。それが登りは良いが下る事が出来ない。登りで力を使い果たしてしまう。という状況を作っているのではないか。登山期間が夏のカラコルムは、春や秋が登山シーズンのネパールに比べて、気候的には登山者側に有利な環境にあるのも、K 2遭難を多くしている要因かもしれない。

最後に登頂者リストを掲載した。登頂者の内4人に1人、41人が日本人である。日本人が初登攀したルートも早大の西稜、日山協の北稜と2本。さらにそれぞれルートのバリエーションが1本ずつと輝かしい歴史を刻んでいる。日本人の登頂後遭難者は82年の北稜を無酸素で初登攀の後、下降中に転落死した柳沢幸弘だけだ。天候にもよるが、傾斜が強いルートも、ロープが固定されてしまえば大量の登頂者を生み出す事が可能である。こうした数字は、高所登山の難しさを私達に教えてくれる。

▼8000m登頂後の遭難

山　名	遭難死	登頂者	%
K 2	22	164	13.4
アンナプルナ I	6	102	5.9
マカルー	7	146	4.8
カンチェンジュンガ	7	150	4.7
エベレスト	36	1052	3.4
ガッシャーブルム I	3	159	1.9
ブロード・ピーク	4	210	1.9
ナンガ・パルバット	3	168	1.8
マナスル	3	176	1.7
ダウラギリ I	5	292	1.7
ローツェ	2	119	1.7
シシャパンマ	2	169	1.2
ガッシャーブルム II	3	422	0.7
チョー・オユー	5	988	0.5
計	108	4317	2.50%

by Xavier Eguskitza

K 2 (8,611m) 登頂者リスト

	年月日	登頂者	ルート	国籍	隊長	備考	
1	1954 7/31	A.コンパニューニ(40)	SE-R	イタリア	A・デジオ	初登頂	
2		L・ラチュデリ(29)	SE-R	イタリア	A・デジオ	初登頂	
3	1977 8/8	中村 省爾(34)	SE-R	日山協	新貝 勲	第二登	
4		高塚 武由(34)	SE-R	日山協	新貝 勲	第二登	
5		重広 恒夫(29)	SE-R	日山協	新貝 勲	第二登	
6	8/9	広島 三朗(34)	SE-R	日山協	新貝 勲		
7		小野寺 正英(33)	SE-R	日山協	新貝 勲		
8		山本 秀夫(27)	SE-R	日山協	新貝 勲		
9		A・アマン(33)	SE-R	パキスタン	新貝 勲		
10	1979 9/6	J・ウィクワイア(37)	NE=SE-R	アメリカ	J・ウィタッカー		
11		L・レイチャルドット(35)	NE=SE-R	アメリカ	J・ウィタッカー		
12	9/7	J・ロスケリー(29)	NE=SE-R	アメリカ	J・ウィタッカー		
13		R・リッジウェイ(27)	NE=SE-R	アメリカ	J・ウィタッカー		
14	1979 7/12	R・メスナー(34)	SE-R	イタリア	R・メスナー		
15		M・ダッハー(45)	SE-R	イタリア	R・メスナー		
16	1981 8/7	大谷 映芳(34)	W-R=SE-R	早大	松浦 輝夫	初登攀	
17		N・ザビール(27)	W-R=SE-R	パキスタン	松浦 輝夫	初登攀	
18	1982 8/14	坂下 直枝(35)	N-R=N-F	日山協	新貝 勲	初登攀	
19		柳沢 幸弘(27)	N-R=N-F	日山協	新貝 勲	初登攀	×
20		吉野 寛(32)	N-R=N-F	日山協	新貝 勲	初登攀	
21	8/15	高見 和成(37)	N-R=N-F	日山協	新貝 勲		
22		重野 太肝二(39)	N-R=N-F	日山協	新貝 勲		
23		川村 晴一(34)	N-R=N-F	日山協	新貝 勲		
24		禿 博信(30)	N-R=N-F	日山協	新貝 勲		
25	1983 7/31	A・De・Polneza(28)	N-R=N-F	イタリア	F・サントン		
26		J・Rakoncaj(32)	N-R=N-F	チェコ	F・サントン		
27	8/4	S・マルティニ(35)	N-R=N-F	イタリア	F・サントン		
28		F・デ・ステファニ(33)	N-R=N-F	イタリア	F・サントン		
29	1985 6/19	N・ヨース(25)	SE-R	スイス	E・ロレタン		
30		M・リュディ(47)	SE-R	スイス	E・ロレタン		
31	7/6	E・エスコフィエ(24)	SE-R	フランス	J・フレザフォン		
32		E・ロレタン(25)	SE-R	スイス	E・ロレタン		
33		J・トロワイエ(27)	SE-R	スイス	E・ロレタン		
34		P・モランド	SE-R	スイス	E・ロレタン		
35	7/7	S・シェーファー	SE-R	フランス	J・フレザフォン		
36		D・ラクロイクス	SE-R	フランス	J・フレザフォン		×
37	7/24	吉田 憲司(32)	SE-R	HAJ	飛田 和夫		
39		山田 昇(35)	SE-R	HAJ	飛田 和夫		
40		村上 和也(30)	SE-R	HAJ	飛田 和夫		
41	1986 6/23	W・ルトキェヴィッチ(43)	SE-R	ポーランド	M・バラール	女性初	
		M・バラール(44)	SE-R	フランス	M・バラール		×

	年月日	登頂者	ルート	国籍	隊長	備考	
42		L・バラール(37)	SE-R	フランス	M・バラール	女性第二	×
43		M・パルマンティエ(36)	SE-R	フランス	M・バラール		
44		M・Abergo	SE-R	バスク	R・Casarotto		
45		J・Casimiro	SE-R	バスク	R・Casarotto		
46	7/5	G・Calcagon(43)	SE-R	イタリア	A・Da・Polenza		
47		T・Vidoni(38)	SE-R	イタリア	A・Da・Polenza		
48		S・Dorotei(35)	SE-R	イタリア	A・Da・Polenza		
49		M・Moretti(35)	SE-R	イタリア	A・Da・Polenza		
50		J・Rakoncaj(35)	SE-R	チェコ	A・Da・Polenza	2度目	
51		B・シャムー(25)	SE-R	イタリア	A・Da・Polenza		
52		B・Furster(30)	SE-R	スイス	K・ヘルリヒコッファー		
53		R・Zemp(28)	SE-R	スイス	K・ヘルリヒコッファー		
54	7/8	J・ククチカ(38)	S-F	ポーランド	K・ヘルリヒコッファー	初登攀	
55		T・ピュトロフスキ(46)	S-F	ポーランド	K・ヘルリヒコッファー	初登攀	×
56	8/3	Chag Bong-Wan(34)	SE-R	韓国	Kim Byung-Joon		
57		Kim Chang-Sun(26)	SE-R	韓国	Kim Byung-Joon		
58		Chag Byong-Ho(25)	SE-R	韓国	Kim Byung-Joon		
59		W・ヴェルシ(44)	SSW-R	ポーランド	J・マイェール	初登攀	×
60		P・ピアセツキ	SSW-R	ポーランド	J・マイェール	初登攀	
61		P・ボジク	SSW-R	チェコ	J・マイェール	初登攀	
62	8/4	W・Bauer(43)	SE-R	オーストリア	A・イミッツアー		
63		A・イミッツアー(43)	SE-R	オーストリア	A・イミッツアー		×
64		A・ラウス(34)	SE-R	イギリス	A・ラウス		×
65		K・ディームベルガー(54)	SE-R	オーストリア	A・Da・Polenza	最高齢?	
66		J・タリス(46)	SE-R	イギリス	A・Da・Polenza	女性	×
67	1990 8/9	名塚　秀二(35)	NW-F＝N-F	横浜山協	植木　知司		
68		今村　裕隆(31)	NW-F＝N-F	横浜山協	植木　知司		
69	8/20	S・スェンソン	N-R＝N-F	アメリカ	S・スェンソン		
70		グレグ・チャイルド	N-R＝N-F	オーストラリア	S・スェンソン		
71		G・モティーマー	N-R＝N-F	オーストラリア	S・スェンソン		
72	1991 8/20	P・ベガン(40)	NW-F＝N-F	フランス	P・ベガン		
73		C・プロフィ(31)	NW-F＝N-F	フランス	P・ベガン		
74	1992 8/1	V・バルベルディン(43)	SE-R	ロシア	V・Balyberdin		
75		G・Kopieka(31)	SE-R	ウクライナ	V・Balyberdin		
76	8/3	C・モンデュイ	SE-R	フランス	V・Balyberdin	女性	
77		A・Nikifrov(37)	SE-R	ロシア	V・Balyberdin		
78	8/16	E・ヴィースチャーズ(35)	SE-R	アメリカ	V・Balyberdin		
79		S・フィッシャー(29)	SE-R	アメリカ	V・Balyberdin		
80		C・Mace(30)	SE-R	アメリカ	V・Balyberdin		
81	1993 6/13	Z・Pozgaj(24)	SE-R	スロヴェニア	T・ヤムニク		
82		C・カルソリオ(31)	SE-R	メキシコ	T・ヤムニク		
83		V・グロシェリ(41)	SE-R	スロヴェニア	T・ヤムニク		

	年月日	登頂者	ルート	国籍	隊長	備考	
84		S・ボジク(42)	SE-R	クロアチア	T・ヤムニク		
85		G・クロップ(27)	SE-R	スェーデン	T・ヤムニク		
86	7/7	P・Powers	SE-R	アメリカ	S・アリソン		
87		J・Haberl	SE-R	アメリカ	S・アリソン		
88		D・Culver(41)	SE-R	アメリカ	S・アリソン		×
89	7/30	A・ブクレーエフ	SE-R	カザフスタン	R・Joswig		
90		P・Mezger(50)	SE-R	ドイツ	R・Joswig		×
91		A・Lock	SE-R	オーストラリア	R・Joswig		
92		R・Jansen	SE-R	デンマーク	M・Nilsson		
93		D・Bidner(28)	SE-R	ドイツ	M・Nilsson		×
94		R・Joswig(50)	SE-R	ドイツ	R・Joswig		×
95	9/2	D・メーザー(32)	W-R=SW-F	アメリカ	D・メーザー		
96		J・プラット(35)	W-R=SW-F	イギリス	D・メーザー		
97	1994 6/24	J・オイアルザバル(38)	SSW-R	バスク	J・オイアルザバル		
98		J・T・フティエレス	SSW-R	カタロニア	A・R・ロス		
99		A・イニュラテギ(25)	SSW-R	バスク	J・オイアルザバル		
100		F・イニュラテギ(27)	SSW-R	バスク	J・オイアルザバル		
101		E・D・パブロ(42)	SSW-R	バスク	J・オイアルザバル		
102	7/4	ロブ・ホール(33)	SE-R	ニュージーランド	R・ドイモフィッツ		
103	7/23	M・グルーム	SE-R	オーストラリア	D・ブリッジス		
104		R・ドイモフィッツ	SE-R	ドイツ	R・ドイモフィッツ		
105		V・グフタフソン(26)	SE-R	フィンランド	R・ドイモフィッツ		
106		A・シュレンフォクト	SE-R	ドイツ	R・ドイモフィッツ		
107		M・ヴァルトル	SE-R	ドイツ	R・ドイモフィッツ		
108		M・ゴズベンコ	SE-R	ウクライナ	V・スビリデンコ		
109		V・Terzeul	SE-R	ウクライナ	V・スビリデンコ		
110	7/30	ホセ・C・タマヨ	N-R=N-F	バスク	ホセ・C・タマヨ		
111		セバスチャン・クルズ	N-R=N-F	アルゼンチン	ホセ・C・タマヨ		
112	8/4	J・S・セバスチャン	N-R=N-F	バスク	ホセ・C・タマヨ		
113		A・Apellaniz	N-R=N-F	バスク	ホセ・C・タマヨ		×
114	1995 7/17	ラジャブ・シャー(45)	SE-R	オランダ	Ronald・Naar		
115		メハーバン・シャー	SE-R	オランダ	Ronald・Naar		
116		Hans・Meulen	SE-R	オランダ	Ronald・Naar		
117		Ronald・Naar	SE-R	オランダ	Ronald・Naar		
118		アラン・ヒンクス	SE-R	イギリス	Rob・Slater		
119	8/13	Lornzo・Ortiz	SSW-R	スペイン	Jose・Graces		×
120		Bruce Grant	SE-R	ニュージーランド	ピーター・ヒラリー		×
121		Javier・Olivar	SSW-R	スペイン	Jose・Graces		×
122		A・ハーグリーブス(32)	SE-R	イギリス	Rob・Slater	女性	×
123		Javier・Eacatin	SE-R	スペイン	Jose・Graces		×
124		Rob・Slater	SE-R	アメリカ	Rob・Slater		×
125	1996 7/29	S・Panzeri	SE-R	イタリア	A・Da・Polenza		

	年月日	登頂者	ルート	国籍	隊長	備考	
126		M•Panzeri	SE-R	イタリア	A•Da•Polenza		
127		G•Maggioni	SE-R	イタリア	A•Da•Polenza		
128		L•Mazzoleni	SE-R	イタリア	A•Da•Polenza		×
129		戸高　雅史(34)	SE-R	F•O•S	戸高　雅史	単独	
130	8/10	K•ヴィエリツキ	N-R＝N-F	ポーランド	K•ヴェリエツキ		
131		マルコ•ビアンチ	N-R＝N-F	イタリア	K•ヴェリエツキ		
132		C•クンツナー	N-R＝N-F	イタリア	K•ヴェリエツキ		
133	8/12	松原　尚之(31)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
134		赤坂　謙三(38)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
135		村田　文祥(26)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
136		吉田　裕一(25)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
137		谷川　太郎(28)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
138		椎名　厚史(25)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
139	8/13	C•G•Huidabro	SSW-R	チリ	Rodrigo Jordan		
140		M•Alvial	SSW-R	チリ	Rodrigo Jordan		
141		M•Purcell	SSW-R	チリ	Rodrigo Jordan		
142		W•Farias	SSW-R	チリ	Rodrigo Jordan		
143	8/14	山本　篤(33)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
144		稲葉　英樹(32)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
145		長久保　浩司(27)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
146		竹内　洋岳(25)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
147		高橋　和弘(22)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤	最年少	
148		佐野　崇(24)	SSW-R	日本山岳会	山本　篤		
149		カルロス・ビューラー	N-R＝N-F	アメリカ	K•ヴェリエツキ		
150		Sergei•Penzov	N-R＝N-F	ロシア	I•ダシャリン		
151		Igor•Benkin	N-R＝N-F	ロシア	I•ダシャリン		×
152		Peter•Pustelnik	N-R＝N-F	ポーランド	I•ダシャリン		
153		R•Pavlovski	N-R＝N-F	ポーランド	I•ダシャリン		
154	1997 7/19	田辺　治(36)	W-R＝NW-F	JAC東海	田辺　治	上部初	
155		鈴木　幹夫(30)	W-R＝NW-F	JAC東海	田辺　治	上部初	
156		中川　邦仁(27)	W-R＝NW-F	JAC東海	田辺　治	上部初	
157	7/28	瀧根　正幹(45)	W-R＝NW-F	JAC東海	田辺　治		
158		中島　明(35)	W-R＝NW-F	JAC東海	田辺　治		
159		山田　良二(34)	W-R＝NW-F	JAC東海	田辺　治		
160		小林　正巳(32)	W-R＝NW-F	JAC東海	田辺　治		
161		ダワタシ	W-R＝NW-F	ネパール	田辺　治		
162		ギャルブ	W-R＝NW-F	ネパール	田辺　治		
163		ミンマ	W-R＝NW-F	ネパール	田辺　治		
164		ペンバ・ドルジェ	W-R＝NW-F	ネパール	田辺　治		

注）1994年７月10日にウクライナ隊の３名が登頂後に遭難死したとされている。
注）×は登頂後に遭難したもの。※資料：everestnews.com,「山岳年間'95」

ネパール・ヒマラヤ2000年春 登山隊一覧表

	山　　名	標高	ルート	国　名	隊　　長	人数	備考
1	サガルマータ	8848	南東稜	ネパール	Ms.Lhakpa Sherpa	4	2000年女性隊
2	〃	〃	〃	カナダ	Mr.Byron Smith	3	
3	〃	〃	〃	スペイン	Mr.Antoni Bahi Alburquerque	2	
4	〃	〃	〃	〃	Mr.Manuel Gonzale Diaz	7	
5	〃	〃	〃	イギリス	Mr Gavin Bate	7	
6	〃	〃	〃	〃	Mr.Henry B. Todd	2	
7	〃	〃	〃	インド	Mr.Syamal Sarkar	7	医療
8	〃	〃	〃	アメリカ	Mr.Christine Feld Boskoff	2	
9	〃	〃	〃	〃	Mr.Robert H.Hoffman	7	環境
10	〃	〃	〃	〃	Mr.Eric Simonson	12	国際ガイド
11	〃	〃	〃	〃	Mr.Randy Todd Burlson	3	
12	〃	〃	〃	〃	Mr.Gary Guller	2	
13	〃	〃	南　稜	デンマーク	Mr.Henrik Jessen Hansen	7	
14	〃	〃	〃	スペイン	Mr.Joan Tomas Gebelli	6	
15	ローツェ	8516	西　面	イギリス	Mr.Henry B. Todd	7	
16	マカルー	8463	北西稜	オーストリア	Mr.Erich Resch	6	
17	マナスル	8163	北東面	秋田海外登研	丸山　芳雄	2	観光省発表は7名
18	アンナプルナⅠ	8091	北　面	スペイン	Mr.Josep A. Pujante	7	
19	〃	〃	〃	フランス	Mr.Thierry Bolo	8	
20	ギャチュン・カン	7952	南東稜	大阪鋭峰会	城　隆嗣	7	
21	クンバカルナ	7710	北　壁	オーストラリア	Mr.Athol Whimp	4	
22	チャムラン	7319	北　壁	イギリス	Mr.Chistopher G.Comeria	2	
23	プモリ	7164	南東稜	オーストリア	Mr.Gerhard Ferst	4	
24	〃	〃	〃	アメリカ	Mr.Worsham Donald	6	
25	ティリッツオ	7134	北　面	好　山　会	小池正器	3	
26	バルンツェ	7129	南東稜	イギリス	Mr.John Baker	5	
27	ガネッシュⅡ	7111	南東稜	信州大学	吉田英樹	7	
28	アマダブラム	6812	南東稜	オーストリア	Mr.Theo Fntsche	4	
29	〃	〃	南西稜	アメリカ	Mr.Ronald Matous	3	
30	〃	〃	〃	〃	Mr.Pasquale V.Scaturro	8	
31	〃	〃	〃	〃	Mr.Matthew Fioretti	2	

（資料提供：コスモ・トレック）

2000年春のネパール・ヒマラヤは、相も変らずサガルマータに一極集中している。31隊の内の14隊、45%を占めており、人数も156名中、71名で46%を占めている。

国別では、アメリカ9隊、イギリス5隊、日本、スペイン各4隊、オーストリア3隊、ネパール、カナダ、インド、フランス、オーストラリア、デンマークが各1隊である。

西ネパールの山々はもとより、ダウラギリ山群やカンチェンジュンガに一隊も入山しないとは、ネパール登山も色褪せた感をまぬがれないようである。

■ 寸 感 ■

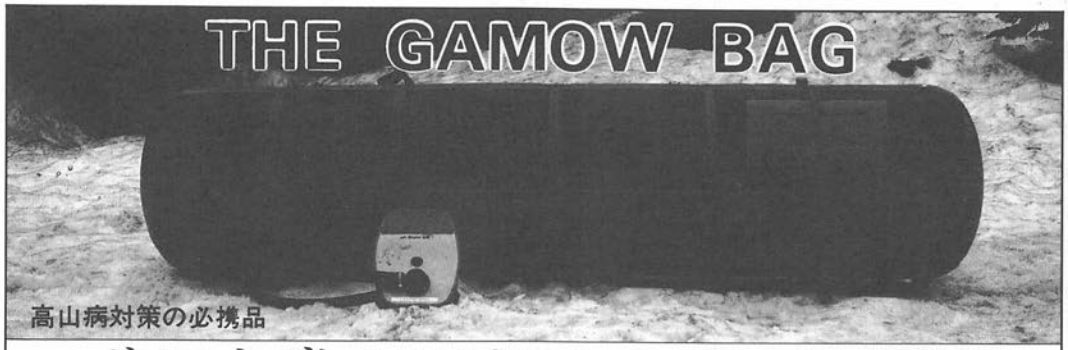
新潮社から「WINNERS2000」と題するスポーツを取上げた年鑑が出た。編集長の言によれば「暇をつぶすための本」であり、ただ単に「面白い」と思ってもらえれば満足とのこと。この年鑑に「登山／ハイキング」の項が4頁収録されている。その中の99年のヒマラヤ登山の主な日本隊の記録として紹介されているのが、野口健（サガルマータ）、13歳少年（クワンデ）、女性ペア（ムスターグ・アタ、初登頂としてサカル・サール、コズ・サール、ウムドン・カンリ、ラハン、リャンカン・カンリである。　これで面白いですか？
福島功氏が同社へ謝罪要求文を出した。（山森）

事務局日誌（4月）

1日（土）　スパンティーク隊、ルオニ隊合宿、（於、ＨＡＪルーム）
2日（日）　第7回「高所登山　事故と環境対策研修会」　豊島区民センター（55名）
3日（月）　登山4団体「ヒマラヤ登山者アンケート調査」　実務者会議（ＨＡＪルーム、山森、岩崎）
5日（水）　理事会通知発送
7日（金）　ヒマラヤ342号発送
8日（土）　ＵＡＡＡ理事歓迎会（代々木、山森）
13日（木）　ＣＭＡ李豪傑氏と懇談（ルーム）
　　ＣＭＡヘルオニ分送金
14日（金）　「ヒマラヤへの挑戦」案内185通発送
24日（月）　東京集会（17名）
26日（火）　豊島郵便局へ第三種書類提出

ヒマラヤ No.343（6月号）

平成12年5月10日印刷　12年6月1日発行
発行人　山森欣一
編集人　山森欣一
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒170-0013　東京都豊島区東池袋4－2－7
　　萬栄ビル501号
　　電話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始！

加圧しただけで約２０００m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg)
●パルスオキシメーター
（血中酸素飽和度測定装置／重量380ｇ／単3乾電池4本使用／携帯型）

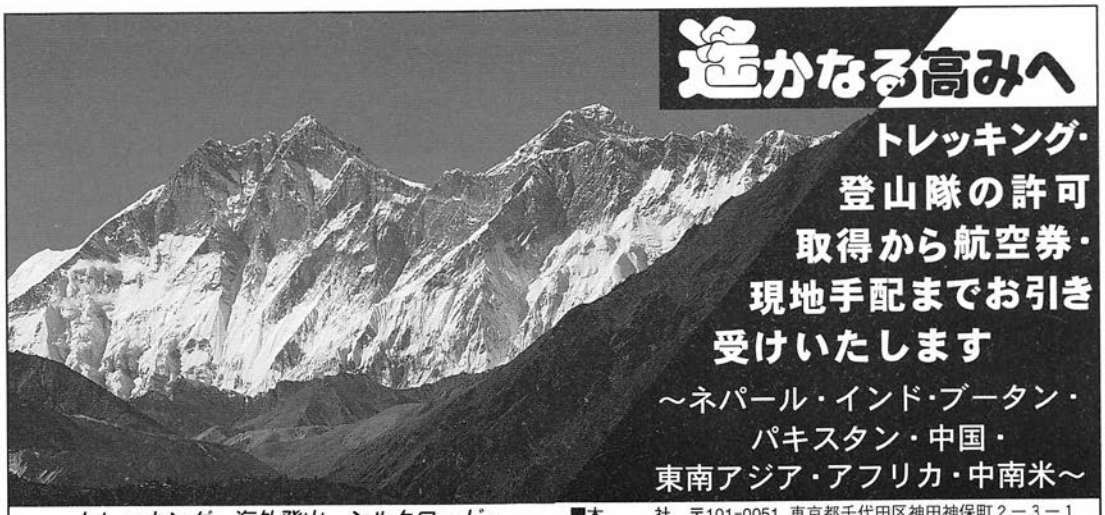
総代理店　：　日本メディコ株式会社
レンタル・販売問い合わせ先　：　株式会社 ティ・エッチ・アイ
〒135　東京都江東区木場2-5-7　ＫＨビル7階
ＴＥＬ：03-5245-0511　ＦＡＸ：03-5245-0510
（隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。）

TREASURE TOUR

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

――遠征隊、トレッキング、秘境への旅――
あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

マウンテントラベル株式会社 ☎03-3574-8880
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F
三井航空サービス代理店2452号



遥かなる高みへ

トレッキング・
登山隊の許可
取得から航空券・
現地手配までお引き
受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・
パキスタン・中国・
東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア

株式会社 西遊旅行
運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本　社　〒101-0051 東京都千代田区神田神保町２－３－１
岩波書店アネックス５階
☎03(3237)1391(代)　FAX 03(3237)1396
■大阪営業所　〒530-0026 大阪市北区神山町６－４　北川ビル５階
☎06(6367)1391(代)　FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING／SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎221707、224248

●格安航空券はこちらに！
キャラバンデスク
キャラバンデスク東京(住所:本社内)　☎03(3237)8384(代)　FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内)　☎06(6362)6060(代)　FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい
(通話料無料)
0120-811395
西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp/)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP

ICI ISHII SPORTS

- 登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601㈹
- スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547㈹
- 新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301㈹
- 新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェアー館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330
- 新潟プラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラーカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メイルオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219

ICI石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004